

# 「生きる」と「大切なこと」の大切さ

## 全機能を失った陸前高田市役所

私たち4名は、平成23年4月30日から5月5日までの間、東日本大震災により甚大な被害を受けた「岩手県陸前高田市」へ被災者支援（災害派遣）に行ってきました。

本来、災害対策の拠点となる市役所自体が津波により全機能を失い、また、同時に多くの市職員の命も奪われました。

東日本大震災から数カ月が過ぎてもまだライフラインが復旧していません。しかし、希望の光である学校が再開し、復興に向けて少しずつですが、歩み始めていました。

富士見町役場 被災者支援チーム

住民福祉課 保健予防係 2名

総務課

防災・危機管理係

1名

上下水道課 庶務経理係

1名

この度の震災において、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、被災された皆様、ご家族ならびに、ご関係者の皆様にご心からお見舞いを申し上げます。

私たちの仕事は、「健康・生活調査」として、地図を頼りに各家庭を訪問することから始まり、住んでいる方の健康状態を聞くこと、それから、必要としている「ケア」が受けられるよう紹介する、というものでした。訪問してみると、親戚の方が避難されていることも多く、日常と、かけ離れた生活を感じました。中には家族がまだ見つからず、毎日探しに行っている方や、震災後に不眠や不安が続く方など、様々なストレスがある様子でした。

そのような状況下であっても、家の片付けや仕事に出ている方がいることを知り、「立ち止まってられない現実」を突き付けられた気がします。私たちの滞在した6日間も、少しずつではあります、が、「がれき」の撤去や仮設住宅の建設などが進んでおり、生活の再建に向けて動き出していました。

心のケアチームの医師から言われた言葉で、印象的だったのが、「東北の方は我慢強く、なかなか相談までつながらない。サインを見逃さないことが大切である。特に男性は、言葉に出すことを苦手とする方が多い。問題が表面化するのはこれからでしょう」という部分です。また、市職員からは「これからも支援が本来に必要です。よろしく願います」と切々に訴えられ、目に見える再建は少しずつ進んでいても、まだまだ先が長いと痛感しました。



防災面から陸前高田市は、地域コミュニティがしっかりしており、それが今回の震災ではとても大切な役割を果たしたと思います。安否確認や避難所の運営、物資の配給にも役立つようでした。普段の生活が地域に根差していたからこそ、お互いに気遣い、円滑に支援を受けられることへ、つながったようです。

今回私たちは、「何かをしたい」「被災者に元気になってほしい」という思いで出発しました。しかし、「遠くからよく来てくれたね」「ありがとう」と言われ、逆にこちらが温かい気持ちになって帰ってきました。まさに、目に見えないところで人と、人との「絆」があり、「生きていく力」を感じました。

これらは、震災前に保健師たちが地域に浸透した活動を行っていた証なのです。このことに気付いた時、「今の自分たちは、一体どうなのか?」「地域住民が、絆や生きる力を感じてくれているだろうか?」「震災への備えは、実は日々の生活や仕事を見直すことではないか?」こんな事を考えながら帰路につきました。

「生きる力」とは、たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもなく、俗に「変化の激しいこれからの社会を生きる力」であると同時に、いかに現状が変化しようとする学び、考え、主体的に判断し、他人と共に協調し、思いやりのある心や感動する心を持ち続けることであると思います。

さらに、「生きていく」ことは、呼吸を続けて、この世にある命を保つことであり、この基本的なことへの「感謝」を忘れないよう「生きる力」を育んでいきたいと実感しました。

